



# あくまで仮定



greentea0117

あくまで仮定

公園で何かぶつぶつとつぶやいている人がいる。私は気味が悪くて、なるべく離れたところに座ってお弁当のふたを取った。弁当を食べ終わり公園を出るときもその人はまだいた。膝には古い新聞がのっているようだ。

公園は仕事場のそばだったのでよく行くのだが、その人は忘れたところに公園にやって来て、ベンチに座り、膝に新聞を広げぶつぶつとつぶやいている。

ある日風にあおられて新聞が飛び、私の足元にふわりと着地した。その人は新聞が飛んだことも気づかない様子でぶつぶつと言っている。私は弁当を食べ終わり公園を出るところだったので、新聞を拾い、その人の膝に置いた。その人はぽかんと私を見た。私は公園を出ようとして振り返った。何か、違和感を感じた。私は取って返してその人の新聞を見た。

そこには不思議な白い物体の写真が載っていた。見出しに大きく、  
『人類、ついに第三銀河に』  
と書かれていた。

「す、すみません、この新聞見せてもらってもいいですか？」

聞いてもその人はやっぱりぽかんと私を見ている。私はそっとその人の膝から新聞を抜き取った。記事には五人の地球人が宇宙船フロンティアにのって宇宙時間三時間をかけて第三銀河に到着した、と書かれてある。宇宙船は白くまるっこく、下にちょんちょんと小さなとがった足のようものが生えている。今でいう何かのゆるキャラのようだ。この不思議な新聞は誰が作ったんだろうか。またぶつぶつとつぶやく声がして、私はその人を見た。どうも新聞が膝にないと落ち着かないようだ。私はあわてて新聞を返した。

「これ、これ、これ」

その人は新聞の写真の一点を、人差し指でぎゅっと押さえていた。それは宇宙の果てに出掛けた地球人のひとりだった。私は写真をじっと見た。それからそれを指さしている人を見た。似ている。いや……同一人物だ。

「あ、あなた、銀河の果てまで行ったんですか？」

この新聞自体信憑性がないと思っていた考えがどこかへ行き、私はなぜかそのことを素直に信じた。

つづく

「だ、大丈夫ですか？」

こういう場合、どうすればいいのだろう。警察？ いやいや、別に犯罪を犯したわけではないだろうし。病院？ でも病院がこの人に何ができるんだろう。私は気持ちを落ち着けようと、ベンチに座った。それにしてもこの新聞はどこからやってきたのだろう。横からのぞき込む。2333年12月8日。頭がくらくとした。これが事実なら、これはいわゆる浦島太郎現象じゃないだろうか。宇宙時間の三時間と地球の時間の長さは違う。むこうでは三時間でも、こっちでは何十年、何百年と経ってしまっているのかもしれない。けれど、2333年に第三銀河とやらに到着したその人は、この二〇一六年で何をしているんだろう？

私は会社に連絡し、急に体調が悪くなったので昼から休むと伝えた。伝えたはいいが、これからどうすればいいのかわからない。私はその人の膝の上の新聞の記事を改めて読んだ。そうしてこの第三銀河探索プロジェクトとやらが、Q大学宇宙開発センターによってとりおこなわれたことを知った。スマホで調べてみるとはたしてそのセンターは存在していた。私はかなり迷ってから、そこへ電話してみた。

「はい、Q大学宇宙開発センター庶務です」

「あのう、すみません」

「はい」

「ちょっと奇妙に思われるかもしれないんですけど、そちらで第三銀河に関する研究はされていますか？」

「少々お待ちください」

普通に、誰々に代わってほしいと言った時のように電話は保留になった。ずいぶん長い間保留のメロディーが流れていた。私は隣に座っている奇妙な人に、

「Q大学、わかりますか？ 宇宙開発センター」

と言ってみたが、その人は相変わらずぶつぶつと何かをつぶやいているだけだった。

「もしもし、どちら様ですか？」

電話の声が代わった。

「すみません、そちらで第三銀河に関する研究ってされていますか？ 実は公園に奇妙な人がいるんです。その人は2333年の新聞を持っていて、第三銀河へ行った宇宙飛行士のようです。新聞の記事に、そちらのセンターが載っていたので電話しました」

「.....少々お待ちください」

今度は先ほどとは違い、戸惑った様子があった。三分ほど待った。

「そのプロジェクトは現在懸案中のものです」

「この人はどうすればいいんでしょうか？」

「車で迎えにいくので一緒に来てください」

私は一緒になど行きたくなかったが、車が来るまで待つしかなかった。三十分ほどしてグレーのどこにでもあるような車が到着した。

「どうぞ」

車の窓から男性が顔を突き出した。

「す、すみませんが、名刺か何か」

窓越しに渡された名刺にはこう書かれていた。Q大学宇宙開発センター 助手 熊谷渡。

「じゃ、じゃあ、この人をよろしく。新聞記事も彼が持ってますので」

「できればあなたも一緒に来てくれませんか」

「いえ、私はただ」

「私どももこの人がうちの関係者なのか、わからないのです。経緯などを教えていただければ助かるんですが」

「……わかりました」

センターは豆腐のように白くこれと言って特徴のない建物だった。四角く黒い窓が点々と並んでいる。

部屋に入るとひげをはやした男性が机に向かっていた。

「先生、この方が……」

先生と呼ばれた人は立ち上がり、

「熊谷くん、もういいよ。どうぞお座りください」

と私たちに椅子をすすめた。助手は出て行った。

「助手から話は聞きました。確かにうちでは銀河系の探索研究を進めています。けれど、あくまで太陽系が属する銀河のことです。その新聞とやらを見せてください」

新聞はその人の膝の上だった。私はそれを抜き取って渡した。

「ふーん」

意外なことに相手は首を傾げた。すぐにでも追い出されるような気がしていた私は、

「何かここと関係あるんですか？」

と聞いた。

「第三銀河も研究を進めてはいます。でも実際人が行くとなると、今の段階ではあくまで仮定の話の状態で現実化は想像もできません。でもこの2333年というのは妙にリアリティがある……」

と最後は呟くように言った。